赤神を創る 男鹿の「赤」に迫る

「地形」から創られた民話を「科学の目」で読みとく

取材・文
森 達哉

協力
林 信太郎（男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会アドバイザー、秋田大学名誉教授）
竹内弘和・太田 圭（男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会事務局）
永井登志樹（男鹿市文化財保護審議会委員）

関連する海ノ民話アニメーション
黒神と赤神の戦い
秋田県・男鹿市

科学の目を通すと、いつもの風景、よく知る物語が異なる姿で見えてくる。秋田の民話『黒神と赤神の戦い』を解き明かす“科学の世界”へと案内しよう。立ち止まって視点を変えたとき、その先の物語があなたの前に広がるはずだ。

黒神と赤神の戦い

秋田県に「黒神（くろがみ）と赤神（あかがみ）の戦い」という、海の民話がある。青森県の龍飛崎（たっぴざき）に住む黒神と、秋田県の男鹿（おが）半島に住む赤神の物語だ。

黒神と赤神は、秋田と青森にまたがる湖である十和田湖に住む、美しい女神に引かれ、求婚する。女神はどちらかを選ぶことができない。黒神と赤神は女神を自分のものにするために戦うが、龍を操る荒々しい黒神が勝ち、負けた赤神は男鹿半島にある洞窟（孔雀の窟（こうじゃくいわや））に姿を隠してしまう。

勝った黒神は十和田湖に向かう。しかし、そこに女神はいない。女神は負けた赤神を追って、洞窟へと行ってしまったのだ。

仕方なく龍飛崎に戻った黒神は大きなため息をつく。それがあまりに大きかったために、北海道が青森県から離れてしまう、という民話だ。

神々はどこで生まれたか

どのようにしてこのような民話が創造されたのだろうか。

秋田の赤い神といえば、「なまはげ」という鬼のような姿をした神（来訪神）が有名だ。大晦日の晩に「悪い子はいねがぁ」と家々を回る荒々しい神である。ただし、民話に出てくる赤神は恋をして戦うことはあっても、悪い子は探さない。なまはげとはイメージが合わない。

神々の正体を探るべく、科学的な視点で民話を読み解いてみよう。男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会のアドバイザーであり、秋田大学名誉教授の林信太郎さんに話を聞いた。

まずは黒神だ。黒神が住む青森県の龍飛崎には黒い岩がある。荒波に削られた海岸にあり、ごつごつとしている。その岩は民話の荒々しい黒神を想起させる。

では赤神を想起させるような赤い岩もどこかにあるのだろうか。「一番赤いのは、舞台島の玄武岩。私は舞台島を推します」と林さんは言う。舞台島は男鹿半島の西海岸にある。

男鹿半島は、東北日本海側のなめらかな海岸線から、長靴のような形で日本海に突き出ている。西海岸は長靴の底にあたる。

大地が与えるインスピレーション

西海岸沿いの道では、多くの奇岩や洞窟を見ることができる。所々にある駐車場には案内板があ

黒神がいる龍飛崎。黒い岩である粗粒
玄武岩のかたまり。

るのみで、余計なものはない。そこから自然が造る芸術作品を鑑賞できる。

その一つは、西海岸の南にある舞台島だ。舞台島は「島」とついているが、島ではなく、陸地から突き出た岩だ。岩の頂上部は平らである。その周りを垂直な崖が囲んでいる。まるで、舞い踊るための舞台のようにみえる。自然が造ったとは思えないこの地形が、「舞台島」の名前の由来である。この舞台島の岩の色が、「赤」なのだ。

ただし、陸地から見た舞台島は赤くは見えない。その「赤」は海からしか拝めないのだ。

舟に乗り、波に揺られながら、岸壁を見上げる。舞台島の中腹が、真っ赤に染まっている。そこが重要な位置だと神が告げているかのようだ。

赤の正体

なぜ舞台島の岩は赤いのか。

その正体は「サビ」だ。公園の鉄棒や古い鉄骨でみる、あの赤サビである。サビとは、鉄が酸素と結合する「酸化」によって、もろくなったものだ。通常は、鉄が酸化すると黒くなるが、高温の状態で多くの酸素と結合すると赤サビになる。

舞台島は、「玄武岩」という火山活動によってできた岩石で構成されている。噴出したマグマが、高温のまま、大量の空気に触れて固まったのだ。

舞台島の玄武岩の赤さは、燃えるような赤だ。くしくもあの「なまはげ」の真っ赤な顔面を思い起こさせる。鬼のような赤なのだ。

あの赤さであれば、民話を創った先人も、赤神を考えつくのではないかと、林さんは言う。

美しい女神に隠された歴史

龍飛崎の「黒い岩」の黒神、舞台島の玄武岩の赤神。そして、この民話に登場する主要な神はもう１柱いる。「十和田湖の女神」だ。

十和田湖は秋田県と青森県の県境にある。“どっちつかず”の位置にある湖、それが十和田湖だ。民話で十和田湖の女神が「青森の黒神」か「秋田の赤神」かを選べなかった話を思い出させる。

上空から見ると十和田湖の形は、万歳をしている人のようだ。この形になった歴史が、穏やかな湖面の下にある。ぐつぐつと煮えたぎる歴史が隠

されているのだ。

湖ができる前、この場所は火山だった。十和田火山は繰り返し噴火を起こした。

中でも1万5000年前の噴火はひときわ大きかった。その時に噴出したマグマの量は200億立方メートル。東京ドーム1万6000個分だ。この数の東京ドームを積み上げると、899キロメートルになる。成層圏を突き抜け、宇宙に至る。

火山の下にあった東京ドーム約2万個分のマグマがなくなると、地盤が落ち込む。山の頂上部がへこみ、鍋のような形になる。これを「カルデラ」と呼ぶ。カルデラに雨水などがたまり、カルデラ湖となる。これが十和田湖の原形だ。

カルデラ湖を造っただけでは、十和田火山は止まらなかった。さらに噴火を繰り返し、カルデラ湖の湖岸付近に新しく火山を造り、カルデラ湖が凹型になった。

それでもまだ止まらない。その火山も噴火を繰り返し、カルデラ湖の中でカルデラ湖を造ってしまう。二重カルデラという珍しい地形だ。その二つ目のカルデラが、万歳をしている人の頭にみえるのである。

二つ目のカルデラが形成された時期は諸説ある。林さんによると最後の噴火は915年の平安時代に起きた。「これが日本という国の歴史上最大の噴火です。ダントツとは言えませんが、ぎりぎりで日本一。だから私は、十和田火山は日本一とあちこちで言っているのですよ」（林さん）。

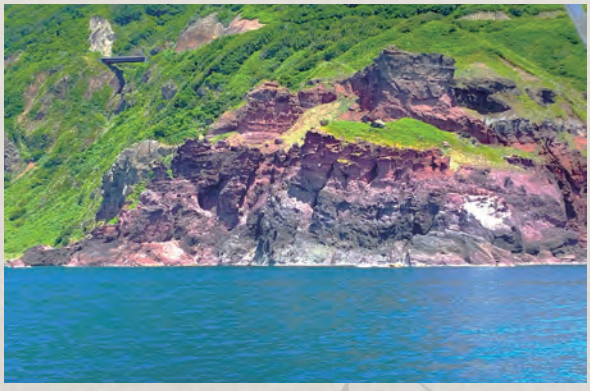
道端の石にも物語がある

物語を創造するインスピレーションを与えるほどの「赤」は、高温で酸化した鉄だった。2人の神が取り合うほど美しい女神は、地下に活発なマグマと歴史を隠していた。そして今この時も、噴火するかもしれないといわれている。

民話を「科学の目」で見ると、いつもとは異なる風景が見えてくる。道端にある赤い石。これはサビだろうか、それとも違う理由で赤いのだろうか。立ち止まって疑問を持つ。

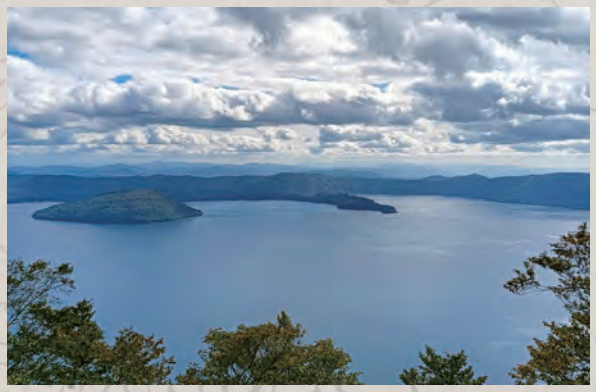
それが物語の第一歩になると、石は教えてくれている。

海ノ民話アニメーション「黒神と赤神の戦い」。



舟から見た舞台島の玄武岩。晴れた日には、真っ赤な色が映える。

赤神が隠れ、女神が後を追った孔雀の窟。今でも女神が現れるという伝説が残っている。



穏やかな十和田湖。この下に活発なマグマが隠されているとは思えないほどのどかな風景。